

イルネスクリプトと臨床能力

藤沼康樹

医療福祉生協連 家庭医療学開発センター

臨床医は日々患者さんの診療をしているのだが、そうした診療の経験を「積む」ことで、臨床能力は伸びていくと昔から言われている。「経験することで臨床能力が伸びる」という言説は、自明のものとされてき



た。とすると、多種多様な疾患をとにかくたくさん診る経験があれば、素晴らしい臨床能力は育つということなのだろうか？ 昔から、救急対応を多数経験できるといったことを「売り」にしている研修病院は多い。これまで、「たくさん症例に曝露させること＝よい臨床教育」とされてきたのではないかと。しかし、本当にそうなのだろうか？

「経験することで臨床能力が伸びる」という言説における“経験”とは何か？ そもそも“臨床能力”とは何を意味するのか？ といったことを考えなければならない。経験が認知的操作を経て変形・加工され、取り出して使える長期記憶として、その臨床医の脳に保存されるメカニズムを知ることが必要だが、このプロセスのキーの1つが「イルネスクリプト (illness script)」である。有り体に言えば、1つの疾患を診ることができるようには、その疾患の診療に必要な知識が「台本 (script)」のように構造化されていなければならないということである。この台本の構成要素は、リスク・病態生理・臨床像の特徴であるとされる。これらの内容は、個々の臨床医によって微妙に異なっているだろう。

興味深いことは、イルネスクリプトが豊かに構造化されるためには、疾患の教科書的な知識だけではなく、症例を経験したコンテクスト（具体的な地域・時間、診療の場など）と実際の臨床経過、患者さんの具体的な特徴（実

際の訴え、顔つき、感情、家族の様子、どう改善／悪化したのか、など）といった、個別症例の記憶が必須だということである。言い換えると、「患者を素材に疾患を学ぶ」こと、つまり教科書的な知識記憶の強化を繰り返すだけでは豊かなイルネスクリプトは獲得できず、臨床能力の向上を図ることができないということだ。

むしろ、必要なことは「疾患を素材に患者を学ぶ」というような逆転した姿勢である。疾患をもつ患者を総合的に診る、具体的にどのような生活をしている人なのかを知る、その価値観を知りケアすることで得られる具体的な経験こそが、真の臨床能力の向上につながるのだ。おそらく、そうした臨床医の姿勢は、患者のケア自体の質向上にも直結する。「イルネスクリプト」「臨床能力」「プロフェッショナリズム」「診療の質向上」は、それぞれが相互に接続していると筆者は考えている。

G

文献

- 1) Schmidt HG, Rikers RM : How expertise develops in medicine ; knowledge encapsulation and illness script formation. Med Educ 41(12) : 1133-1139, 2007. PMID 18004989